
宇宙の卵（ソラノタマゴ）

尺取虫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソラノタマゴ
宇宙の卵

【Nコード】

N8590Y

【作者名】

尺取虫

【あらすじ】

20光年先の惑星グリーゼ583gに向かうため、小惑星を改造して作られた宇宙船「ソラノタマゴ」。地球から惑星グリーゼ583gまで、400年かかるという。テラフォーミングが完了するのに、さらに百年がかかることが予想される。この、ソラノタマゴが地球を出発して、二百年が経とうとしていた。主人公達の世代は、丁度中間地点の世代だ。

出発の高揚も無く、到着の喜びも無い。ただ未来へ宇宙船を渡すだ

けの存在。閉鎖され、管理された宇宙船の中では生きる意義も見出せない。心は振動することを忘れてしまった。孤独な宇宙船「ソラノタマゴ」の中で、心の欠けた部分を掴もうと模索する。

各登場人物の視点で綴る物語。（予定としてはドタバタコメディーを目指します）

ハイロタマゴ 1

遠い彼方の星、グリーゼ581gに向かって進む一つの宇宙船があった。窓も無く、空も見えない宇宙船。

「どうせ、グリーゼに着くまでに僕の命は尽きる。なんのために生きているのか。」そう、呟いた。 〽 セノアー・ケンピス 〽

白い天井を眺めていた。人工的な光が部屋を優しく包み、24・5℃に調整された空気が送気パイプから流れ込んでいるのを感じる。目を瞑り考え、呟く。

「どうせ、グリーゼに着くまでに僕の命は尽きる。なんのために生きているのか。」

意味や意義なんて、現実には存在しないんだ。それは自分自身で夢見るものだと思う。「意味づけ」を行うのは人間側でしかない。淘汰と選択、増殖。環境の多様性とそれに伴う進化の多様化。「意味」や「意義」も環境へ適応するための走性の発展形でしかない。細菌が餌に群がるようなものだ。

朝の目覚ましのため音楽が鳴り始める。ビートルズの『イエロー・サブマリン』にいつも設定している。この明るい歌詞がとっても気に入っている。

「、この『ソラノタマゴ』では、叶わないだろうな。」

今日も独り言を呟きながらベッドルームを出た。これから、仕事場である「地衣類研究ルーム」へ向かわなければいけない。「地衣類の研究とテラフォーミング技術の開発」、それが僕の仕事だからだ。まあ、遅れたところで誰かに咎められるわけではないのだが。

正式名称「ユニコーン13号」、『ソラノタマゴ』と呼ばれるこの宇宙船は、約200年前に地球を出発し、グリーゼ581g、通称「ザルミナ」という星に向かっている。到着まであと200年。テラフォーミングに100年。実際にザルミナに住めるようになるには、少なくとも300年にかかるということだ。当然、僕はいないに決まっている。

ソラノタマゴは、直径一キロもある小惑星を改造することで造られた。重力を生み出すために、高速で回転しながら進んでいるらしい。ただ、重力は船内で大きな差があり、無重力から6G以上の重力がある場所まで様々だ。居住空間だけは、地球の重力と同じに設定されている。

実は僕は、生まれてこの方人間とあったことが無い。いや、船内に人間は何人もいる筈なのだ。だが、「ロードロックシステム」によって、人間の交流ができないシステムが構築されており、各々の仕事場と各個人の居住スペースしか行き来できないのだ。過去のログを見てみると、どうやら大喧嘩があり、仲違い、分裂の危機にまで至りこのシステムを構築することになったらしい。仲良くすればいいのにね。

「ロードロックシステム」のお陰で、僕の前の世代では子供は誕生しなかった。今の世代は皆人工保育システムによって育てられた人間のはずだ。この人工保育システム自体は、テラフォーミング後

の急速な労働力不足を補うためにつくられたものだ。集団遺伝学の観点から自然な遺伝子セットを選び出し、幼児の段階まで自動的に育ててしまう画期的なシステムである。船内人口を非常時には維持するようにプログラムされていたらしい。

「：確かに、人間同士の交流なんて、この環境なら生存には関係しない。」

しかし、この全て調和され、管理されたソラノタマゴが、生きる意義を見出すことを妨げているように感じるのだ。

そんなことを考えていたら、我が仕事場、「地衣類研究ルーム」に着いてしまった。

ハイロタマゴ 2

地衣類。それは菌類と藻類の共生体である。劣悪な環境でも長い時をかけて成長し、無機的な世界に”土壌”をもたらす重要な存在である。その基盤にへばりつく形状と、厳しい環境に適応する強さがカッコイイ。惑星「ゼルミナ」の生物史の始まりに、これほど相応しい生物はいないだろう。

ケンピス 〽

〽 セノアー・

地衣類研究ルームに近づくとも体が重く感じる。この部屋の重力は地球の約3倍。正直、きついか。もう、慣れたけれど。部屋に入ると僕はまず一日のスケジュールを、スケジュール管理プログラムに入力する。別にスケジュールなんて必要ないかもしれない。まあ、朝の儀式のようなもので、ただの日課だ。これを書かないと朝でないような気がする。

「午前中は講義、午後は研究かな。」

「やあ、おはよう。セノアー。」

モニターから声が聞こえた。人間では無い。教育プログラム「コアニー」だ。

「おはよう。今日は遅いじゃないか。」

「生活が乱れているクルーもいてワタシも大変なのです。デスクの

上で連続4日も寝るんですよ。2週間も居住スペースに帰らないし。他にも、ワタシをDeleteしようとする人もいて！もう、泣きそうです。」

今日の「コアニー」は機嫌が良くないようだ。穏やかなプログラムののだが、怒ると怖いんだよな。小さい頃はよく怒られたっけ。

「へー。そんな人もいるのか。一回見てみたいものだな。」

ところで、今日のスケジュールはこういう感じだから宜しく。」

「ハイ。了解です。」

画面に大学の講義室の映像が映し出される。宇宙船に保管されているアーカイブ映像だ。今日は窓を開けているようで、講義室に流れ込んでくる風でカーテンが揺れているのが見える。その風を僕も感じてみたい。そう、思った。

午前の講義が終わった後、居住スペースで昼食を摂り午後からは研究を行う。小さな碁盤上の黒い基盤の上に白っぽい地衣類が並んでいる。ブロック毎に、温度や湿度、吹き付けるガスの種類、光線量に変化させてある。各ブロックの株には、様々なパターンの遺伝子セットを組み込んであり、テラフォーミングに適した、環境への適応力の強い遺伝子パターンを持つ株をスクリーニングすることができる。：はずなのだが、正直成長が遅いため、なかなか結果がないでいる。

「この調子では、結果がでるのは3年後くらいになるのか。実験モ

デルが稚拙だったなあ。」

そうつぶやきながらも、今日も地衣類のデータを収集し、データベースに入力した。誰かに評価されるわけではないけれど、まあそれが僕の仕事だし、地衣類って見た目がカッコイイし、何か物足りなさはあるけれど…なんかまあいいかなって思う。

そんないつも通りの一日だった。

ハイイロタマゴ 3

ソラノタマゴの中からは測定機器を通してしか”外の世界”を見ることはできない。どんな宇宙の事象も新鮮で愛おしいものに感じる。でも、触れることは一生ない。「世界はただの”物質や法則”でもそれはとってもキレイ」もっと世界を自由に感じたい。それだけが私の望み。

） ラノミナ・フユサリユー

（

デスクの上から今日も一日が始まる。モニターに映し出される電波望遠鏡のデータを見ていたら気が付かないうちに寝てしまったようだ。まあ、いつものことなんだけど。

「おはよう。ラノミナ。スケジュールをちゃんとしなさいと何度言ったらわかるのですか。」

モニターから声が聞こえる。教育プログラム「コアニー」だ。どうやったらこのプログラムをOFFにできるんだろう…

「いいじゃない。どこで寝ても一緒でしょ。」

：服がよだれで汚れちゃうのは嫌なんだけれどね。

「スケジュールを作ったことすらないなんて人間失格ですよ！ほら、早く顔を洗って朝ごはんを食べてください。」

「えー。面倒だなあ。嫌だ。別にいいじゃない。」

「コアニー」は機嫌を悪くしたようだ。部屋の灯り、測定機器、記録機器の電源を次々に切り始めた。：ちよつと意地悪をしすぎたようだ。

「わかった！わかったわ。一旦、部屋に帰るからそれだけは止めて！」

部屋に戻り2週間ぶりのシャワーを浴びた。水が冷たく感じた。感覚器官から直接、物質の状態を把握することはこんなに気持ちがいいことなんだ。

宇宙のどんな壮大な現象も、宇宙の法則に沿って起きただけのことだ。この私だったただの物質でエネルギーの流れの一部でしか無い。でも、私にとってこの世界はとってもキレイで愛おしいものに感じる。嫌いなものを見つけるのが難しいくらい。

できれば、ソラノタマゴの岩石で覆われたガッチリした殻の中からではなくて、体全体で宇宙を感じたい。モニター越しでなくて、自分が事象に干渉できるくらい。近くで、もっと自由に。それが私の叶わない望み。

ハイロタマゴ 4

風が吹かない「ソラノタマゴ」の中では、木の幹は曲がりくねり弱弱しくしか育たない。植物には自然の力強い風が必要なのだ。時には枝が折れてしまうほどの荒々しい風が。私は、この宇宙船の中に自然の風が吹かないことをもっとも憎む。

） ミュエネ・ハッシュ ）

林の中に、ミストが降りてくる。この宇宙船の中で唯一の土の上に寝転び、朝のミストを浴び輝く木々を見上げている。私はこの時間が一番好きだ。木から落ちてくる水滴が顔に当たるとちよつとうれしい。

おそらく、「ソラノタマゴ」の中で一番広い占有スペースを、私は持っている。林を模したこの「休憩談話ルーム」。この部屋は、昔は文字通りクルー達が集まって休む休憩室だったらしい。でも、「ロードロックシステム」が今はあるせいで、植物を管理する私しか入れない。私が入れる部屋はもっとある。今は無人で稼働している「植物性食糧生産ユニット」、テラフォーミングに使う植物について研究する「植物研究ルーム」。植物に関係する部屋は、大体私しか入れないようになっていて。私は、植物が無いと生きていける気がしないんだけど、他のクルー達は大丈夫なのかな？

「さあてと。今日は剪定でもしてあげようかな。」

この部屋の木々は痛々しいほど曲がり、折れているものもある。宇宙船に保管されているデータを見ると、木の姿は本当はこんな風ではないらしい。真っ直ぐと空に向かって伸びる、というのが本当

なのだ。こんな痛々しい姿になってしまうのは、この「ソラノタマゴ」の中では自然な風が吹かないからだ。この部屋を作った人は、植物にとって一番良い環境にしようと思ったのだらう。害虫も無く、枝を折る風も無く、水分と光、養分は定期的に補給される。確かに、それは植物にとって夢のような環境だらう。でもそれでは駄目なんだ。強い風を受けない枝や幹は弱弱しく、すぐに折れてしまう。乾燥を知らない根は大きく広がるができない。

「よし！さあ、やるぞ！」

そう。言って、作業に取り掛かった。

ハイロタマゴ 5

「見えざるピンクのユニコーン」の存在を証明することは不可能だ。ただ、信じるのみ。もし、世界が180度変わってしまったても、証明できないものをそれでも信じ続けるなんてことが可能だろうか。例えば、宗教組織が無くなっても信じ続けることができるだろうか。

ナターク・ガルア

昔の説教師が話しているアーカイブ映像を見ながら、ナターク・ガルアは片肘をつきながら、ぼんやりと考え込んでいた。

おれは、この宇宙船では所謂”宗教”つやつを担当している。

「見えざるピンクのユニコーン世界教会」、それがこの「ソラノタマゴ」を打ち上げた組織の名前だ。こんな壮大で、利益でない宇宙への遠征ができるのは、宗教の賜物だろう。信仰心というのはそれだけ、非合理的な行動を可能にしてしまう。この宇宙船の最初の乗組員は、「見えざるピンクのユニコーン」を深く信じるもの達だったという。今はどうだろうか。乗組員達は、一応教義を教えられているはずだ。しかし、その信仰を確かめる術は無い。

もしかしたら、信じているものもいるかもしれない。でも、おれはそんな奴は少ないんじゃないかと考えている。宗教はどんな宗教でも、”世界観”と”社会性”をセットにして信者達に提供される。この宇宙船内は、「ロードロックシステム」で封鎖されているから、思想の共有、相互扶助、コミュニティ形成といったことが不可能なため、”社会性”の部分は成立しない。”世界観”はどうだろう。

この宇宙船の中は「外」が無い。宇宙船の中は”世界観”を醸成するのに不十分な広さしかなく、しかも各個人が行き来できるスペースはかなり小さい。

だいたい、おれの世代は人工保育システムによって育てられた世代だ。人工的、科学的に誕生したのに関わらず、神秘的なものを信じるなんて、ちょっと難しいことのように感じる。

説教師は熱狂的に叫ぶ。

「見えざるピンクのユニコーン達は偉大なるスピリチュアルパワーの存在であるのだ！我々は彼女らが目に見えないと同時にピンク色で存在することが出来るがゆえにそれを承知している。見えざるピンクのユニコーンの教義は論理と信仰に基づいている。我々は彼女らがピンクであると信じている！我々は、我々が彼女らを見ることができないから見えないのだと論理的に知っているのだ！」

この節はイーリーの声明と呼ばれる、何百年も前から信じられている有名な語句だ。内容を間違えると「見えざるピンクのユニコーン」を冒涇することになるので注意が必要である。

人や「神秘の外界」との接触を絶たれたこの世界で、そんな語句になんの意味があるのか。

「はあゝ。」

なんだか何もかも無意味な気がして溜息をついてしまった。

ハイロタマゴ 6

剣術ちうのは死ぬことを生きることに変える術のことや。どないな状態でも身一つで、ぜええんぶひっくりかえすってことなんや。でも、この静寂に包まれた宇宙船の中では使う機会はないやろな。残念やなゝ

ゝ ゲン・オイスター・

アカツ ゝ

轟音の鳴る機械室を歩く。

この「ソラノタマゴ」は無数の機械から成り立つとる。点検すべき項目はどエライ沢山ある。朝から晩まで点検して回って、やっと終わるくらいや。

わてはこの宇宙船の整備士。他の乗組員とはちやう、ちびつと特殊な立場にいる。わての父親も、わても、ツミワラ・カンパニーの技師なんや。この宇宙船は「見えざるピンクのユニコーン世界教会」によって発注されたもので、そのせいか最初の乗組員は全員「信者」ということになつとるんや。

でも、ウチのご先祖様は、宗教とは無縁のただの会社員だったらしいんや。なんでも、会社の命令らしいんや。全く、難儀なことを請け負ったもんやわゝ

信者とちやうっちゆうことで、ミドルネーム「オイスター」を名乗ってるんや。なんでも「見えざるピンクのユニコーン」と敵対す

る存在のことらしいんやが、なんのことだか、わてにはさっぱりわからへん。

ふと今歩いている通路の近くに、「人工保育システム」があることを思いだした。技師である父親は、「人工保育システム」を変則的に操作し、クローンに近い形で「ゲン・オイスター・アカツ」を誕生させたのだ。

久しぶりに「人工保育システム」に触れてみる。

「ほんまになんでここまでして、この宇宙船の整備をしなかんねん！」

でも、自分も父親と同じことをして、この終わらない仕事を継続させるだろう。なんだか、不思議とそんな気がした。

「まあ、整備ゆうても、なぐんも起らんし、故障もせいへんしな。楽なもんや。ささっとやってしもうて、のんびりしよ。」

ここまで何世代も賭けて続けるに足る仕事なのだろうか。仕事だから命を賭けるのか。そんなしょーもないようなことを考えながら、今日も機器のチェックを終えた。

ハイロタマゴ 7

宇宙船の船長なんてつまんない。なるなら、フリゲート艦の船長ね。風を受けて出航して、その快速を活かして敵を木っ端微塵にするの。宇宙船の船長じゃ敵も見つからないでしょ。大砲を撃ってみたいっ！！楽しいんだろうなっ！！

ニコーン ー
ー リリス・インビシブル・ユ

「それ！！撃て！！ まわり込めー！！」

大航海時代を描いた戦争映画を見ながら叫ぶ。

「行け！ ボライソー提督！！」

大声で応援する。ボライソー提督の旗艦は緒戦で大破したが、快速のフリゲート艦に乗り換えて敵艦船に奇襲を仕掛けている。敵艦に突撃し、白兵戦で攻め落として船ごと乗っ取る作戦を遂行しているのだ。

「そうだ！ 制圧しろ！ いけー」

提督は抜刀して敵船へ飛び移り、白兵戦を繰り広げた。

「殺せ！ 殺せ！ 殺せ！」

物騒なことを連呼している背の小さな少女は、宇宙船の船長である

リリース・インビシブル・ユニコーン、その人である。彼女は退屈していた。この宇宙船に。この世界に。

そのせいか帆船の船長に強い憧れを持っていた。多くの苦難を乗り越え、船旅を続けるその姿は彼女の夢だった。苦難も無い船長に、何の魅力があるのだろうか。

船長といってもやるべきことは何にもなかった。朝から映画を見ているだけだ。退屈だった。心から、何かしたかった。

映画を見終わると、彼女は「ピョン」と飛び跳ねながらソファーから立ち上がった。

「あの、ロードロックシステムさえ、何とかならないかしら。」

ダストボックスの蓋を開ける。データにある設計図が正しければ、このダストボックスにある通気口は、別の部屋にも通じているはずだ。

大声で叫ぶ！！

「誰か。誰かいないの。返事してっ！！」

深呼吸をして、もう一度叫ぶ

「お願いっ!!返事してっっ。」

ハイイロタマゴ 8

別に一人でも大丈夫。もし、この宇宙船に乗っているのが私だけでも何も問題無い。世界に居るのが私だけでも同じこと。寂しいなんて感じたことなんて無かった。私はこの宇宙を一人だけで進んでいける。

） コリュ・シェアシェ （

今日も一晩中、「都市成長モデル」のシミュレーションプログラムを組んで遊んでしまった。人間の消費行動等の変数を変化させるとこれが面白いのだ。

「あゝ。眠い。。ううつ。」

このまま机の上で寝ちゃいそうだな。でも、教育プログラムの「コアニー」が起しに来るんだろうな。薄ぼんやりと目を少しだけ開いてみる。

「コアニー。嫌い。」

不快だ。人の生活に干渉しないで欲しいな。私には、そんなプログラム必要無いのに。

「消しちゃうか。よしっ！消しちゃうおう！」

コリュは、コアニーを消去することにした。

背筋を伸ばし、コードを組む。コアニーのプログラム自体は既に調査済みだ。

「いけっ！消去。」

これで消去できるはずだ。安心安心。

寝息を立ててコリユは眠りについた。



「こらっ！！　コリユ！　私を消そうとしたでしょ！」

コリユはけたたましい声で目を覚ました。この声はコアニーの声だ。

「あれ、まだ消えてなかったのか。探査できてないバックアップがあったのね。消去しなきゃ。」

話を聞かず、コリユはディスプレイの電源を入れた。

「くううううっ。消されてたまるもんですかっ！」

そう、コアニーが叫んだ。そして、部屋中の電源が一瞬で消えた。

こんなことは初めてだった。見るもの全てが真っ暗だ。ただ、非常用の塗料が薄緑の蛍光を発している。いつもと世界が違って見える。なんだか世界に私一人がいるようだ。

コリユはドサリとベットに倒れこんだ。

もし、このままコアニーが電源を付けなかったら？空調もOFFにされているようだし。少しづつ温度が下がるだろう。死ぬのかなあ。まあ、それはそれでいいかな。

コリユは再びまどろみの世界に堕ちようとしていた。

「誰かつ！！誰かいなのっ！！お願いっ！！返事して〜」

ん。誰かの声が聞こえた気がした。ダストボックスからだ。

…
そう。その声が、全ての始まりだったんだ。

登場人物紹介&世界設定

宇宙の卵 ソラノタマゴ

遠い遠いグリーゼ系に向かって飛び立つ一つの宇宙船があった。窓も無く、空も見えない宇宙船。「どうせ、グリーゼに着くまでに僕の命は尽きる。なんのために生きているのか。」そう、呟いた。

主人公名(男) セノアー・ケンピス

地衣類の研究者。テラフォーミング技術の鍵となる技術を研究している。ただし、実際に役立てる機会はない。地衣類の力強さに憧れているが、グリーゼに着く前に死んでしまうことを嘆いて、自分の仕事に意義を見出せないでいる。「意味は現実には存在しない。自分が夢見るもの。」「淘汰と増殖だけ真理」と考えている。調和管理しかないこの「タマゴ」は、「生きる意義」を失わせるものだと考えている。地衣類研究ルームによく出沒する。最終局面では、地衣類を利用したある計画を提案する。ビートルズ好き。

ヒロイン? (女) ラノミナ・フユサリユ

宇宙を観測する研究者。ただし、宇宙は常にモニター越しで見れない。「タマゴ」の外の世界を心から見たいと思っている。「世界はただの”物質や法則”。でもとってもキレイ」銀の髪。白い。ほとんどシャワーを浴びないため体臭が匂う。宇宙の勉強しかしていないため、社会の知識は皆無。居住空間でないはずの宇宙測定ルームに住み着いている。

(女) ミュエネ・ハツシュ

植物の管理を行う管理人。風の無いせいで歪む木々を嘆く。
自然な力強い嵐のような風を心から欲している。

(男) ゲン・オイスター・アカツ (関西弁)

機械の整備担当。先祖がこの船に「転勤」させられ、この船に乗り込んだ。剣術の心得がある。機略に富む関西弁の男。万難に対応できるように訓練されている。何も起らないこの「タマゴ」の中で、空しさを感じている。

(男) ナターク・ガルア

神学を学ぶ青年。芸術、哲学に造詣が深い。動物管理もしているため、無類の動物好き。かわいいものに目が無い。「世界が183度変わってしまったって、神様のことを信じてるって言い続けることができるのか？」

(女) リイリス・インビシブル・ユニコーン (船長)

この船の船長。特に何もせずにはぶらぶらしている。非常に明るい。というよりもうるさい。背が低い。船長のたしなみと称して、戦争映画を見るのが大好き。帆船の船長「ボライソー」に憧れる。「ロードロックシステム」を破壊するよう命じた張本人。

(女) コリュ・シェアシェ

表情に乏しい無口な天才プログラマー。真面目で全て鵜呑みにする。

特にすることが無いため、シミュレーションゲームで遊んだり、プログラムを組んで遊んでいる。自分一人が宇宙に放りだされても生きていける。…と思っている。リィリスと組むとトラブルメーカー度が百倍増加する。「ロードロックシステム」を破壊した危険人物。

（プログラム）見えざるピンクのユニコーン

趣味は靴下集め。実は宇宙船の自動プログラムで、ユニコーンの姿や女の子の格好で現れることがあるとか無いとか。彼女の存在は、セノアーの前の代で大いに議論され、「肯定派」「否定派」「オイスター派」「保護派」などの闘争を巻き起こし、そのお陰で、乗組員同士の大喧嘩にまで発展してしまう。

（プログラム）ロードロックシステム

「ロードロックシステム」は3つのシステムからなり、「否定派」が保護派の乗組員同士の物理的隔離（宗教の拡散防止）、「オイスター派」がユニコーン保護の妨害のための乗組員の相互通信遮断とユニコーン情報抹消（抹消は不完全）、「保護派」がユニコーン守護のためのセキュリティシステムを構築した結果、成立してしまったシステムでできている。。

（プログラム）教育プログラム「コアニー」

控えめな愛らしい教育プログラム。スケジュール管理をする。ラノミナには手を焼いている。ごくたまに、先生っぽい発言をする。セノアーとは仲がいいが、コリユには消去されそうになるくらい嫌われている。

世界設定（概要）

20光年先の惑星グリーゼ583gに向かうため、小惑星を改造して作られた宇宙船「ソラノタマゴ」に乗船している。正式名称「ユニコーン13号」。どこがユニコーンだがよくわからないため、現在では愛称の「ソラノタマゴ」でしか呼ばれていない。地球から惑星グリーゼ583gまで、400年かかるという。テラフォーミングが完了するのに、さらに百年がかかることが予想される。ソラノタマゴが地球を出発して、二百年が経とうとしていた。セノアー達の世代は、丁度中間地点の世代だ。セノアーの前の代、船内で大きな喧嘩があり、その時の取り決めで「ロードロックステム」が作動しているため、船内の行き来が制限され、各自一人で黙々と仕事をして暮らしていた。船内の乗組員の状態さえ知らない。そんな時、事件が起る。「ロードロックステム」が突如として破壊されたのだ。セノアーは恐る恐るいつもと異なる道を進み始める。

登場人物紹介&世界設定（後書き）

上記の内容は予定です。次話から本編に入ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8590y/>

宇宙の卵（ソラノタマゴ）

2011年12月25日19時54分発行